

中村天風著「心に成功の炎を」日本経営合理化協会 1994年9月27日刊を読む

[訓言1] 人間としての本当の自覚

この世の中には、他人の気持ちや、また、事件や病^{やまい}のために、すぐに無条件で圧倒されてしまう種類の人間と、反対に、全然そうした悪い力に倒されない人とある。我々は、倒されないほうの人間の仲間になって生きること努力しなきゃいけない。

[訓言2] 「自己を知れ」という言葉の意味

有事の際の自分を明瞭に認識すること。

何か事のあったときにあわてやしないか、
思いがけない事件に出くわしたときにうろたえやしないか、
冷静な考え方がメチャメチャになってしまわないか、
というような自分の欠点・短所を有事の際にどうだと
深く掘り下げて考えなきゃだめなんだ、
そうすると自然と自分の本当の姿が自分の心に映ってくる。

[訓言3] およそ人生の一切^{いっさい}の事件は、ほとんどそのすべてが自己の心の力で解決される

(1)人間がこの世で生きていく上で自分というものを本当に^と研ぎあげる一番根底に必要なのは「自信力」、「自らを信ずる力」

(2)「およそ人間世界の出来事というものは、清純なる水のようなもので、本当から言うと味もおいも色も絶対がないんだ。けれどもその味もなく、色もなく、においもないものが、人間の心の中に宿っている自信力の強さ、弱さで、その出来事はなんといろいろな味がついてくる、においがついてくる、色がついてくる」

(3)およそ人生の一切の事件は、ほとんどそのすべてが自己の心の力(自信力)で解決される。心の力(自信力)こそは生命の内部光明である。この光明こそは、いかなる場合があっても、不滅^{ふめつ} 不断^{ふだん}の常世^{とこよ}のともしびとして、我が命の中に輝^{かがや}かしていかなきゃならないのが、人間として自己に対する責任である。

[訓言4] どんな人生の出来事でも、その責任の一部分は必ず自分にもあるということを忘れてはならない

(1)およそ人間の身の上には、その人の心の中になくはない。

(2)我々人間の生きている背後には、始終そこに、その人の思い方のおりに物をつくろうとす

る力が控えている。

(3)現象の背後に必ず実在あり。

[訓言5] 悲しいことやつらいことがあったとき、すぐに心に思わせなければならないこと

(1)「すべて消極的な出来事は、我々の心の状態が積極的になるともう人間に敵対する力がなくなってくる」ということ。

(2)どんな場合にも、心を明朗に、一切の苦しみを^{ほほえみ}も微笑にかえていくようにしてごらん。そうすると、悲しいこと、つらいことのほうから逃げていくから。

[訓言6] すぐれた人には絶対に不運というものはこない

(1)すべての真理を知った^{せいけん}聖賢の周囲にはいわゆる不運というものは絶対にこない。発生しない。

(2)聖賢とは、心がただ積極的であるばかりでなく、本当の心の強さの中に「気高さ」をもっている人のこと。卑屈にやせ^{がまん}我慢で強さをつくろうとするのではなく、淡々として少しも気張らずに強くなりえているのを「気高い強さ」という。

(3)「心の強さの中に^{こうしやう}高尚な品位をもつ人」

[訓言7] 本当に幸福を感じうる人というのはその心の中に絶えず高尚な積極的観念が熱烈に燃えあがって生きている人

(1)すべてをその高尚で積極的な心的態度で美化、善化して、幸福化してしまう人。

(2)本人が幸福化している以上は、不幸はない。

(3)幸福とは主観的断定だから。

[訓言8] 運命を正しく征服するための2つの教え

(1)第一、我々は、悪魔が好んで行おうとする悪いことの反対を実行してこそ、いつも完全に運命に勝つことができ幸運になりうる。

(2)第二は、何事でも、人生に生じた事柄をすぐに運命だと^{はやがてん}早合点をするような軽率な行為がなくなったならば、人生の安全や幸福や平和がどのくらい増進するかわからない。

[訓言9] 人間の意志とか知恵とかいうものは、絶えず細心の注意と修養を^{ほどこ}施して、その向上を完全にすべく、入念な訓練を与えなければならない

(1)意志も知恵も訓練を施さないと、その性能を本当に発現はできない。

(2) ちょうどそれは、軍隊がいかに国家・国民を守るものだとはいえ、正しい訓練を与えられていない軍隊は完全にその兵力を発揮することはできないのと同様。

[訓言 10] よき運命と意義ある人生をおくるための教え

(1) 心の中に常に正しい向上の希望をもたない人間は流れない水にひとしい。その人生に何の変化もない。運命は、ふたをした壺の中に入れておかれるのと同じで、さらに少しの意義をも発揮しない。

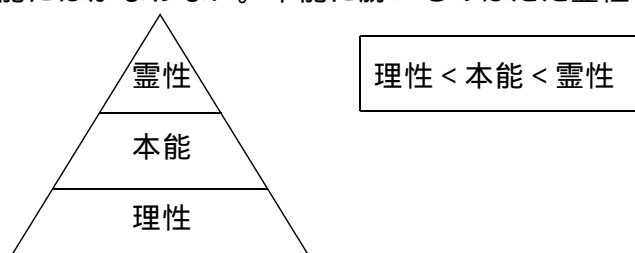
(2) 青年の間は、心の中に常に正しい向上の希望をもって歩かなければダメ。

(3) 偉大な発明、偉大な発見、あらゆるすべてのこの地球上における人類の進化、向上は、夢をもった人間がこれを現実にし、そして、その結果、人間の世界に良い方向を与えてくれる。

[訓言 11] すぐれた人たらんと欲する者が知っておかねばならない教え

(1) 自分を知るものは賢者である。しかし、真に自分を信じるものは立派な哲人である。

真にすぐれた人たらんには、ただ理性のみを崇拜していたのではだめである。理性はけっして下等な本能にはかなわない。本能に勝つものはただ霊性のみである。



(2) 正しくその人を精神的に向上せしめることがはじめて人を救うことになる

[訓言 12] 自覚が進み、悟りが開けると、人は人生の苦悩というものを感じなくなる

(1) 人間というものはいかに自覚が進み、悟りが開けても、人生の苦悩と称するものとは縁を切ることはできない。

(2) 縁を切ることはできないが、自覚のできた人間は、その苦悩をもっとよりよく ^{たましい}魂 ^{かて}の糧として、どんどんいいことに振りかえていく。だからやたらに失望したり、落胆したりはしない。

(3) 落胆するようなことがあったら、「よおし今度こそこの失望、落胆を自分の糧としてこの上を乗り切っていくぞ」とこの勇気を出さねば、勇気はつねに勝利をもたらし、恐怖はつねに敗北を生むといつも言う。

[訓言 13] 人生の苦悩というものは絶対的なものか。つまり、逃れあたわざるものか否か

(1) 人生の苦悩は、けっして絶対的なものではない。人生の不幸というようなものは、ほかから

ふってわいてくるように自分の人生に忍びこんでくるものではない。

(2)むしろ苦悩に対応するときの心の態度で、その苦悩を感じる程度が違う。人生の苦悩は、どこまでも相対的なものだとは断定していい。

自分の心がある事柄を不幸と感じたから不幸になる。不幸と感じなかったら不幸にならない。不幸だとか幸福だとかいうのはその人の考え方。考え方が人生を幸福にしもし、不幸にもする。

人生の不幸は我^{みづか}自らが生んだもの。

(3)このことは、常に、私が自分自身を、どんな場合でも、ああ恵まれているなあ、幸いななあと思わしめてくれて、今日までずっといつも感謝の捧げきれないほどの楽しみで生きている一番善い、私への自己訓戒。

[訓言 14] 運命に関する悟り

(1)運命よりも心のほうがまさっているときには、運命の力はいつも心の力の配下になってしまう。

(2)もしよくない運命がきたならば、それを悔^くやむ前に厳かに自分で裁判すべし。

[訓言 15] 自分で自分の正^{せいじや}邪を、いいとか悪いとかを、正しく裁判することのできない人ぐらい、およそ下等なものはない

(1)何か事が起こったら「あ、私が悪かった」と言う。

だれでもいいから、私が悪かったと言って罪を背^{せお}負ってしまうとけんかにならない。人が一言でも「あ、私が悪かった。それをそこに置いたものだから壊れたのね」というふうに言うだけけんかにならない。

(2)どこまでも自分がいいとばかり思って少しも自分の欠点を自分で感じない人は、人間として一番下等なものではないかと思う。

[訓言 16] 自分が自分を弁護して正しく自分を裁判しないと反対に運命のほうから人生によくない判決と宣告とを与えられる

(1)いくら自分で、私はいいんだ、私はいいんだと自分をひいきしていても、それが真理に背いていけば、運命のほうから黙っていても、グウッとその人間に貴様の考え方は間違っているぞという好もしくない判決や宣告を与えられる。

[訓言 17] 幸福ということに関しての自分自身への顧^{かえり}みについて

(1)幸福というものは、人に自分の幸福を話すときよりも人にも自分と同様の幸福を感じせしめるときのほうが本当の幸福だ。

(2) あなた方が、この道に入って、この道でもって人生に生きる生き方の面目めんぼくを一新するならば、それだけで非常な喜びだが、それをまた人に語って、またその喜びが、次から次へ伝わったときのことを考えてごらん。

あなたからご紹介を受けた人が、あなた方同様に、健康もよくなり、運命もよくなったのを見たとき、どんな大きな喜びを感じるか。

[訓言 18] 自己を完成し、その力の許すかぎり偉大な人となることが、およそ人間の一番の幸福であると同時に、それがまた、人間の第1の義務である

(1) こう考えて、私は自分自身を一生懸命とに研ぎあげていまだに研ぎあげることおこたに怠りありません。今言ったとおり、できる分量が多けりゃ幸福だと同時に、それが人間として生まれた者の義務。

(2) このような考えで、私は一生懸命に、修行をつらいとも思わなければ、どんな難行苦行なんぎようくぎようだってもうやめてしまおうと思わない。義務だ、義務だと思っているから。

[訓言 19] 人間として生きていくときに一番忘れていけないことは何か

(1) 我々人類にこの人生は何の理由で与えられてあるかということを正しくまず自覚するということだ。

(2) 人生をたとえ一分間でも価値なく過したり、また弱めたり、あるいはまた、自分の心に泥塗どろぬるような悶えもたを感じせしめるために、我々はこの貴重な生命しじゆうを与えられたものではないということを、始終はつきり、忘れずに、心の中に記憶して生きること。

(3) けんかしてみたり、怒ってみたり、悲しんでみたり、ねたんでみたり、憎んでみたりする時間がくだらない時間。

弱々しい人生を自分の心でつくって生きたり、知らない間に心を泥だらけにするような悶えを心を感じせしめていないか。

(4) そんなことをするために我々は万物の霊長としてのすぐれた生命を与えられているのではないということをしょっちゅう自分の心の中に明瞭に、忘れないで記憶して生きなさい。

(5) パツと腹が立って何か人に言おうというときに、「あっ、いけない、ここだ、価値なく過ごしてはいけない」とわかるようになること。

自分の体の弱いことなど悔くやんできたとき、「あっ、いけない。こんなことで弱めちゃいけない。そんなことをするために命は与えられてはいない」と気付くようになること。

[訓言 20] 人間というものに信念がどれだけ大事かということ

(1) 人間と信念というものの関係はちょうど魚と水のようなもの。魚は水なくしては生きられない。それと同様に人間は信念なくしては一日といえども生きていられない。

(2) その信念とは何か。毎晩、寝際に鏡にむかって「おまえ、信念強くなる」と言っていると自然にわかる。

毎晩毎晩、自己暗示を与えているうちに「あ、これか」とわかってくる。

[訓言 21] 「ああ恵まれた、幸せだなあ」というふうを感じる本当の人生の状態とは

(1) 人生に何の悶^{もだ}えもないときが一番幸福。何の悶^{もだ}えもないときが一番幸せ。

(2) ああ、あれが欲しい、これがこうなりたいというときは幸福でない。一つの要求がでてくると、それが満たされるまでは少しも幸福を感じない。

(3) ただ現在与えられたものをもって満足すること。その分に安^{やす}んずる習慣をつけること。

「
」

[訓言 22] 人間を感情の動物と考えているかぎり、本当の人間としての価値の発揮もできなければ、また真の幸福というものを味わうことはできない

(1) 人間は感情の動物ではない。

人間は感情を自由に統御しうる生物、靈知的生物。

だから、感情に負けて、感情に追いまわされている人間は人間としての面汚^{つらよご}しであるばかりでなく、人間としての資格を自ら冒瀆^{ぼうとく}している人であり、同時に自ら人間としての権利を放棄した人、人間としての資格を自分から捨てる人。

(2) 本能や感覚をもととして生じてくる感情・情念^{たく}を巧みに統御して人生に生きる者が本当の万物の靈長たる人間。

悲しいことがあっても、それを楽しみにふりかえる。

苦しいことがあっても、それを楽しみにふりかえる。

腹が立つことがあっても、それを楽しみにふりかえるというふうに、おのれの心をスッ、スッと変えていく。

熟練した技師が精巧な機械を動かすように心を自由に動かす。そうあなた方もなりうる。

[訓言 23] 人生50年、生きている以上はみだりに死ぬことは許されない。と同時にみだりに生きることは許されない

(1) 多くの人々はみだりに生きているから、人生の三大不幸という「病^{やまい}」や、「煩悶^{はんもん}」や「貧乏」というものに侵されがちだ。だから、病、煩悶、貧乏というのは、自ら招いたこと。

現在、病をもったり、煩悶をもったり、貧乏な人は、ここいらで反省しなきゃあだめだよ。

(2) 「玉磨^{たまみが}かざれば光なし」の歌にもあるが、石も磨けば玉になることがある。「私なんかだめだ」と捨てちゃだめだ。いくら磨いても玉にならないとしても、磨かない玉よりはよくなる。

[訓言 24] 人生に対する計画

- (1) たった今を正しく生きるにはどうすればよいかということを忘れないこと。
- (2) 現在ただ今を尊く生きること。
- (3) 現在ただ今をどう尊く生きるか、これをしょっちゅう考えることを自分の念頭から離してはならない。

[訓言 25] 正しく考えうる心とは何だろうか

- (1) 正しく考えうる心とは、理性でもなければ感情でもない。ただ霊性である。
- (2) 霊性というのは、どんなに自己の利害が相剋するような場合でも、事柄の判断を感情や理性で考えるような間違いを起こさない。
霊性というのは、本心良心で考えるからである。

[訓言 26] 凡庸は嫌忌怨憎の人を退けることを潔しとするが、真人はそういう人を退けず、進んで和して称して与せざらんことを心がける。至人は和して与せざるのみならず、しかも常にこれを良性に導くことに努める

- (1) 普通の人(凡庸)は自分の嫌いな人、憎らしい人、ねたましい人、恨めしい人を自分に近づけないで、なるべく排斥することをもっていいと思っている。
- (2) 真の人間をして生き方を知って「真人」になれば、たとえ自分の心に憎らしいとか、嫌だと感じるものがあったとしても、そういう人をけっして退けない。清濁併せ呑んで、その人を排斥しない。
- (3) さらに真人から進んで、徹底した統一道の奥義に達した「至人」になると仲よくして、与しない(その人の心にこちらが与してはいかない、つまり、よくない方面にはけっして与しない)ばかりでなく、常にこれをよいほうへ、よいほうへと導くことに努力する。

[訓言 27] 凡人はみだりに人との争いを好み、真人は争わず、常に和合することを心がけ、同時に常に許し合う

- (1) 人を憎むことは罪悪である。そういう人間は、お互いが現在こうして生きているということをお互いに大切に思わないからである。
- (2) 人間としてのお互いのもっとも肝要な自覚は、お互いの一人ひとりが生きていてこうして世の中に存在しているという厳粛な事実を心から尊敬しあわなければいけないということである。
- (3) そうしてこそ自然とそこに本当の愛の情というものが湧きだしてくる。

[訓言 28] 何人といえども他人に反省を強制する権限はない

(1) 反省というのは、自分自身が自分自身になすべきもので、人に強制すべきものではない。

[訓言 29] 何事も忍耐の一字が解決するということを忘れてはいけない

[訓言 30] 何かで腹を立てたり、あるいはヒステリックに興奮している人には、事情のいかんを問わず、心をこめて、それを忍ぶ^{しの}ことを一生懸命に勤めて、その気分をやわらげることに努力しなければならない。けっしてそれに共鳴したり、油をかけたり、けしかけたりしてはならない

(1) そうでなければ、その人をいたずらに不幸に追いこむ手伝をしているという愚^{おろか}なことに結論がなってしまう。

(2) 「腹を立てて得をした人は一人もない」(昔のことわざ)

[訓言 31] 人間この世に生存する真の価値は、その生存に対して、より高い目的を認めて、そうしてその高い目的を生きているという現実と、その現実を真理に順応して育てあげることによって達成するんだという信念する者にのみ正しく認識される

(1) 自分自身が生きていく場合に対して、より高い目的を認める。

(2) そして、その高い目的は、こうして生きているという現実と、その現実を真理に順応して育てあげることによって達成されるという信念をもつこと。

終りに臨んで一言希望を

1. 自分の命は自分のもの。
2. その自分を自分でもって困らせるようなことはしない。
3. どうせ、つらいこと、悲しいことだらけの世の中を生きるとき、つらいことをつらいと思わず、悲しいことを悲しいと思わず生きる。
4. 苦をなお楽しむの^{きが}概^{がい}をもって生きてこそ、否、もっとすすんでいえば、「矢でも鉄砲でもってこい。苦しいこと、つらいこと、束になってこい。そんなものに負けるおれじゃない」というような勇氣一番。
5. この人生を正々堂々と、^{そうごん}莊嚴、雄大に生きられんことを。
6. さらに大きな期待と夢と楽しみを胸に描いて、自己を^と研ぎあげられることを。

[コメント]

中村天風先生の 31 の「天風訓言」と「最後の一言希望」は、人生を自信をもって真正面から歩むにはどうしたらよいかをていねいにお説き頂いたものとしてこれほど有難いものはない。この「心に成功の炎を」は「成功の実現」、「盛大な人生」、「いつまでも若々しく生きる」の中村天風先生の代表的な四部作の一つ。時間をかけて、ゆっくりと一語一句かみしめ、自らをふりかえりながら、

天風先生のお話を直接お聞きするようなつもりで熟読すべき名作と確信する。この著作を通じて、「信念」の大切さを学びたい。

- 2009年8月14日林明夫記 -